

戦争の頃の小学生の生活の様子

岡 本 末 子 さん

私が国民学校2年生の時、戦争が始まりました。寒い日の朝、皆と並んで学校へ行っていました。酒津から子供の足で40分はかかります。その時、どこかのおじさんが「戦争が始まった」と言いながら、自転車で走って行きました。これは恐ろしいことだ、どうしたらいいのかと、私は心の中で考えながら学校に行きました。3年生になってから、もう学校では勉強する時がないくらい、兵隊さんが乗っている汽車が通る時間が来ると、毎日山陽本線の線路沿いに立って旗を振りながら見送ってあげました。夏休みは馬の食べる草の草刈が宿題でした。1人何束と決められていたので、私は父と一緒に山の方や河原の方へ行ってあし葎やススキを刈って干して、大きな束をいくつも作り学校へ持って行きました。高梁川はしの土手は昔は道はなくて、綺麗な芝生きれいが植えてありました。その芝生も40センチくらいを四角に掘って、束にして学校へ持って行きました。飛行場へ植えるためだったようです。また冬には、高梁川はしを船で渡り、八幡山はちまんにある松の木を運びました。2メートル位に切った松の木を1人3本位担いで降りてくるのですが、松の木から油すを採るのだと聞きました。また中洲す小学校の校庭の周りには、防空壕ごうを作っていました。警戒警報が鳴り出したら、皆その穴の中に隠れていました。ウーと鳴ったら警戒警報で、ウーウーウーと鳴ったら空襲警報です。皆その防空壕ごうの中に入ったら、いつB29が飛んで来るかわからないので話もできません。その防空壕ごうも皆町内の人や家の父母たちが来て、穴を掘りその周りに畳せみを敷いて、その上に畳せみを乗せて土をかけて丈夫に作ってくれました。日数が過ぎるとその畳せみの中から草が生えてきて、異様な臭いがしてくるようになりました。子どもたちは頑張りました。あの頃は運動場全部が芋畑でした。空襲が激しくなると、私たちは机と椅子を運んで、各町内のお寺やお宮で勉強をしました。でも、蝉せみの声を聞きながらの勉強も楽しかったと思います。体操の時間は薙刀なぎなたの練習があり、敵が攻めて来たらこれで突きなさいと教えられました。昭和20年6月、水

島に空襲がありました。私たちはその時学校へ行く途中だったのですが、私たちは皆すぐ家に急いで帰り、爆弾の落ちるのを目の前で見ました。その時、大勢の死者や重傷者が出たりしたとは知りませんでした。あの頃はシンガポールからと言って、ゴム製品を色々と学校へ送ってくれました。ボール、消しゴム、運動靴等色々あ



りましたが、どれもくじ引きで、なかなか皆には渡らなかったと思います。あの頃は靴等履いている人はおらず、藁^{わら}で作った草履でした。それも遠いところから来る人はボロボロになってしまうので2日も履くことは出来ず、素足で学校に行きました。昭和20年8月15日は暑い日でした。子どもたちは酒津の池で泳いでいましたが、その時誰かが「戦争に負けたのですぐ帰ろう。アメリカ兵が来る。」と大声で言ったので皆すぐ家に帰りました。その途中、「アメリカ兵が来たら殺される。」と言ったので、私は本当にその言葉を信じていました。死ぬ覚悟でした。その後、倉敷にもアメリカ兵の駐屯地が出来て、いつもジープに乗った兵隊さんがいっぱい来ました。ターバンを巻いた人、真っ黒い顔の人が乗ったジープが何台も何台も続いて通りました。その人たちは子どもたちにチョコレートやガムをくれました。アメリカ兵も日本の子どもが可哀想に見えたのでしょう。時々友達と会ったらこんな話もしていましたが、80歳を過ぎるとその人たちもいなくなり、話すこともなくなりましたが、このような事があったことを後世の人に知ってもらいたくて、思い出しながら書かせてもらいました。先日も中洲^す小学校の校庭に立って、昔を思い出して来ました。